

鉄道人物伝

No.2

広軌改築計画の中止を 決断した総裁 床次竹二郎



床次竹二郎の胸像
(作：朝倉文夫)

小野田 滋 / 情報管理部 担当部長

■ 官僚の頂点へ

床次竹二郎は、1866(慶應2)年12月1日、現在の鹿児島市新照院町で、薩摩藩士であった父・正精(1842~1897)の長男として生まれました。1877(明治10)年の西南戦争で自宅の周辺は激戦地となりましたが、少年だった竹二郎は最期の戦いに向かう西郷隆盛の姿に大きな影響を受けたと伝えられます。同年11月、明治政府に出仕して東京で上等裁判所の裁判官となっていた父に呼ばれて上京し、共立学校(のちの開成中学)、大学予備門、第一高等中学校を経て帝国大学法科大学(現在の東京大学法学部)政治学科へと進み、1890(明治23)年7月に同校を卒業しました。この時期、西洋画に傾倒していた父・正精が洋行を企てて莫大な借金を負ったため一家は困窮しましたが、

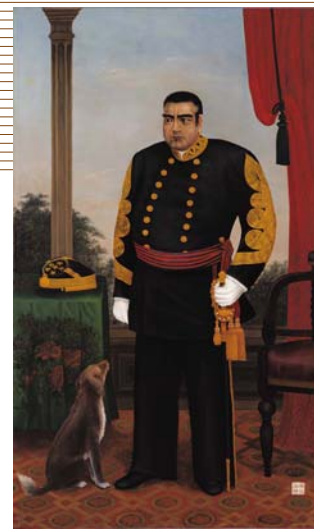
正精の描いた西郷隆盛の肖像画は、その後も西郷隆盛として伝えられる肖像の基となり、さらに勅命によって帝国憲法発布式典の図を描くなどして絵画の分野でその名を残しました。

帝国大学卒業後の竹二郎は大蔵省に入省し、預金局勤務を経て主税局を兼務し、1893(明治26)年には愛媛県収税長となり、翌年には宮城県に転じて内務部第一課長、さらに1895(明治28)年には内務省に移って岡山県警察部長となりました。その後も、山形県、新潟県、兵庫県、東京府を経て1904(明治37)年には徳島県知事(当時の首長は官選)、翌年には秋田県知事に就任しました。1906(明治39)年1月には、第一次西園寺公望内閣が発足して内務大臣に原敬が就任し、床次は内務省地方局長となって原の注目するところとなり、1911(明治44)年には内務次官に抜擢されました。また、1909(明治42)年には海外の地方制度を視察するため半年間にわたってヨーロッパ、アメリカへ派遣されて見聞を広めました。

■ 鉄道院総裁と鉄道大臣を歴任

1912(大正元)年12月に官を辞した床次は、1913(大正2)年2月20日~1914(大正3)年4月16日に第一次山本権兵衛内閣のもとで鉄道院総裁となり、1918(大正7)年9月29日~1920(大正9)年5月15日に原敬内閣のもとで内務大臣兼鉄道院総裁(鉄道省昇格)ともなる鉄道院総裁廃官後も内務大臣を継承)となったほか、1931(昭和6)年12月13日~1932(昭和7)年5月26日には犬養毅内閣の下で鉄道大臣に就任し、後藤新平と同様に3回にわたって鉄道のトップとなりました。

1913(大正2)年に発足した第一次



床次正精の描いた「西郷肖像」
(鹿児島市立美術館所蔵)

山本内閣で、床次は第4代の鉄道院総裁に就任しましたが、初代の後藤新平は逓信大臣と兼務、2代目の原敬は内務大臣と兼務、3代目の後藤新平は逓信大臣と兼務でしたので、最初の専任総裁となりました。総裁就任後は、後藤と同様に職員の待遇改善に力を入れ、共済組合制度の改善や慰安会の開催、職員表彰規定の制定(効績章制度のはじまり)、教習所組織の整備などを行いました。

その後、1918(大正7)年に発足した原内閣で内務大臣兼鉄道院総裁(第9代)となりましたが、鉄道院は1920(大正9)年5月に鉄道省となったため、床次が最後の鉄道院総裁となりました。在任期間中は、1919(大正8)年5月に本院に建設局を創設して新線の建設に積極的に取り組む体制を整えたほか、鉄道構造物の設計業務を工務局から総裁官房研究所に移管しました。また、この時期は労働運動が高揚した時期(いわゆる大正デモクラシー)でしたが、1920(大正9)年には労使の意見交換を行って意思疎通を図るための組織として国有鉄道現業委員会を発足させたほか、福利厚生の一環として購買部(のちの物資部)を設置し、職員が生活必需品を安価に購入できる制度をスタートさせました。

1931(昭和6)年に発足した犬養内閣

で鉄道大臣に就任した床次は、1932(昭和7)年3月に鉄道弘済会こうさいかいの認可にあたり(決裁は先々代の江木翼えき鉄道相の時代に行われた)、傷病により退職した職員や殉職者の遺族を雇用して、その生計を支える制度を発足させました。また、省内の調査機関として1932(昭和7)年2月に陸運統制委員会を設立したほか、同年3月に鉄道懇談会、新設線路設備調査委員会をそれぞれ発足させて、鉄道省の改革を推進しました。しかし、同年5月に発生した五・一五事件によって犬養首相が暗殺されたため内閣は総辞職し、鉄道大臣の在任期間はわずか5ヶ月にとどまりました。

■ 広軌改築計画の中止を決断

床次は、後藤新平が熱心に取り組んだ広軌改築計画に対して反対の立場をとり、1913(大正2)年には準備工事を中止するように通達しましたが、次に成立した第二次大隈重信内閣では軌制調査会を設置して蒸し返し、次の寺内正毅内閣でも準備工事中止を破棄する稟議が提出されるなど、その可否は混沌とした情勢が続きました。鉄道院総裁就任後の1913(大正2)年11月に立憲政友会に入党した床次は、翌年4月の衆議院議員補欠選挙で無投票当選となって、以後、鹿児島県選出の衆議院議員として政治家の道を歩みましたが、広軌改築計画に対する反対は立憲政友会の主張として第二次西園寺内閣の頃から貫かれていた方針でした。

その後、1919(大正8)年に開催された第41回帝国議会で鉄道院総裁として「新線の建設、複線化、勾配の改良、電化、連結器の改造などの優先課題があり、現在の狭軌のままでも改良を加えれば輸送力は低下しない。」(要旨)



1926(大正15)年の政局を巡って私邸で後藤新平(右)の訪問を受ける床次竹二郎(左)

と答弁し、さらに土木技術者でもあった鉄道院副総裁の石丸重美が「狭軌を改良して鉄道網を完成させる方針である。」(要旨)と補足し、ここに広軌改築計画は正式に中止されました。この帝国議会では地方鉄道法の制定と鉄道敷設法の改正についても審議が重ねられ、地方鉄道法は1919(大正8)年に施行されましたが、鉄道敷設法は床次の総裁退任後の1922(大正11)年に新たな新線建設を盛り込んだ鉄道敷設法(改正鉄道敷設法)として制定され、法律に基づく地方ローカル線の整備が推進されることとなりました。

■ 政党政治の狭間で

床次が鉄道と関わった大正時代から昭和時代初期にかけて、日本の政治は政友会を軸として政党が離合を繰り返す、のちに政友会と民政党による二大政党の時代へと移行しましたが、床次はその狭間の中で政党間を右往左往することとなりました。転機となったのは、1921(大正10)年11月に政友会総裁の原敬が東京駅頭で暗殺された事件で、1924(大正13)年には政友会を脱党して政友本党を旗揚げしてその総裁となりましたが、1927(昭和2)年には政友本党を解党して憲政会と合同して立憲民政党を結党しました。しかし、翌年には民政党を脱党して、1929(昭和4)年には政友会に復帰しました。また、広軌改築計画をめぐる対立関

係にあった後藤新平ともパイプを確保し、1926(大正15)年には後藤の仲介によって政友会と政友本党との融和を模索した時期もありました。床次は、首相候補の一人と目されていたものの、原敬や犬養毅を暗殺で失い、政党政治が行き詰まって軍部の勢力が増すという歴史の大きな流れの中でその機を逃し、1935(昭和10)年9月8日、通信大臣在任のまま70歳で永眠しました。

床次は広軌改築計画の中止を決断した総裁として知られるためか、後藤新平に比べて鉄道人としての評価は高くありませんが、広軌改築計画を除けば後藤の路線を継承して職員の待遇改善や新制度の導入に積極的に取り組んだ総裁として人望も厚く、のちに職員の拠出金によって鉄道省本省の玄関に後藤と床次の胸像が寄贈されました。この胸像は、戦時中の金属供出によって失われましたが、1983(昭和58)年に国鉄中央鉄道学園に再建され、さらに鉄道総合技術研究所の講堂横に移転して、現在に至っています。また、鹿児島中央駅の駅前広場には、床次竹二郎顕彰碑建立推進会によって1978(昭和53)年に同じ胸像が設置されました。

文献

- 1) 床次竹二郎伝、床次竹二郎伝記刊行会、1939
- 2) 小野田滋：床次竹二郎と鉄道、RRR、Vol.70、No.6、2013